

# 犬とビクターと私

## 磯 英行

ビクター在職中で、ビクターマークの犬・ニッパーにまつわる思い出をいくつか話したいとおもいます。昭和四十四～四十五年頃、PR本部（現・広報室）に所無し、会社のイメージアップとマスコミへの新製品のPRを担当していたときがあります。当時会社商品のPRとイメージアップの為、銀座五丁目の中央通りと、みゆき通りとの交叉したところに、ビクターがショールームをオープンさせることになりました。オープンの日、私は招待したお客さまにお土産を手渡す役をしていました。お昼過ぎ頃、お客さま方で混雑しているとき、松下幸之助氏が食事に来たついでだとおっしゃり、突然立ち寄られました。私は、松下幸之助氏か一通りショールーム内をご覧になった後、ころあいを見はからって赤・青・黄三色の犬の灰皿をお土産として松下氏にお渡ししようと思いました。すると、松下氏はお土産をその場で見たいとおっしゃり、お土産をあけてご覧になりました。耳をかたむけた犬の灰皿を両手にもって、目をちかづけ、しばらくのあいだ興味深く、じっと見つめておられたのが、

私にとって実に印象深い思い出になっています。その時、松下氏にお渡したものと同じ犬の灰皿は、今も私の家の居間に宝物として飾って大事にしてあります。また、もうひとつの思い出は、やはりPR本部で幼児向けに絵本「ニッパー物語」の自主制作を担当したときのことです。絵本「ニッパー物語」は、ビクター音楽教室を巾広く展開するための「ニッパルティ」として、教室の生徒さんにくばられることになっていました。私は、ニッパーが蓄音器から流れてくる亡き飼主の声に耳をかたむけている有名なフランシス・パラウド氏の絵と、その由来がかかれた資料を渡し、製作をお願いしました。資料をわたして一カ月後、厚手のボール紙を貼りあわせたいわゆる幼児絵本「ニッパー物語」が出来ました。すばらしい絵と簡単明瞭なストーリーの出来ばえに大変感動をもって受け取ったことを今でもはつきり思い出します。この本は私にとって忘れられない思い出の一冊となりました。ビクターマークは、「ニッパー物語」とともに幼い子供から大人まで幅広い層の人達に今後とも愛されていくことと確信しています。